

市長は、よく「なぜ、あいさつをするのか？ それで何が生まれるのか？」と尋ねられると言います。

市長は、なぜ、あいさつすることが「日本一の福祉のまち」につながるのかということ、今一度、市職員がきちんと理解し、そして市職員が市民の方々に伝えることができるようになってこそ、福祉のまちにつながっていくと考え、改めてその思いを話されました。

1日のうち、14時間は孤独な時間

入院施設や介護施設などを「もっと作ってください」という声をよく耳にします。ただそれは、介護する家族の立場からの意見であり、介護される本人は、自宅で過ごせることが一番良いと思っています。

施設でも、在宅でも、Aさんという要介護者の方は、1日のうち、2時間しか見てもらえないという現実があります。

●施設の場合

入所者80人に対して、40人の職員が従事している。

その内訳は…	{	夜勤	4人
		明け	4人
		休み	12人
		<u>勤務</u>	<u>20人</u>

つまり、入所者1人に対し、職員が1日に関われる時間は…

$$\underline{\text{勤務20人}} \times 8 \text{時間勤務} \div \text{入所者80人} = \text{1日あたり2時間}$$

わずか

●在宅の場合(※)

要介護度が重い方の場合、月約35万円までの介護サービスを受けることができる。

1日当たり約12,000円 = **ヘルパーさん約2時間分の金額**

※所得や利用状況により異なるため、必ずしもこの通りではありません。

施設では、Aさんに「おーい」と呼ばれても、職員は忙しくて、相手をする事ができません。これは在宅でも同じで、Aさんの家族は働きに出ていて、ヘルパーさんが来てくれる時間以外、Aさんは、ほとんどの時間を1人で過ごしています。つまり、施設でも在宅でも、1日のうち、睡眠時間の8時間、介護を受ける2時間を除くと、Aさんは残りの14時間を孤独に過ごすこととなります。マザーテレサも言っていますが、人間にとって「孤独が一番辛い」のです。

以前、私が愛知たいようの杜にいたとき、たいようの杜の職員には、「そこにいるAさんを見捨てないで、チラッとでも声を掛けてほしい」と言い続けてきました。それでもAさんに対して、十分な声掛けができないので、たいようの杜の中に地域の人や隣接する幼稚園の子どもたち、動物までも入れてAさん

への声掛けをお願いしてきました。

一方で、在宅介護の方のお宅を訪ねると、ベッドの周りには写真立てがいっぱい置いてあり、「これは旅行仲間、こちらは踊り仲間」と教えてくれますが、そういう仲間もだんだんと A さんのところに来なくなるものです。しかし、ベッド横の窓を開けると、そこには隣人の姿がある。その隣人が「A さん、最近はどうだね？元気にしとるかね？」と声を掛けてくれたらどんなにいいでしょうか。

小学校単位で地域がつながる仕組みづくり

今の長久手市は、市民の方が困っていると、主に市職員が飛んでいきます。介護施設では、2対1の対応ですが、市の場合、5万対500、100対1です。人員的にも市職員だけでは、市民が困っていることに対応しきれない状態です。だからこそ、小さな単位、例えば小学校区単位で、地域を支えていく仕組みづくりが必要だと考えています。

現在、子供会連合会や民生委員児童委員協議会というように、同じ役割の人達が全市的に集まるような会合はありますが、それらが小学校単位で地域とつながっているような仕組みにできないかと考えています。

A さんの気持ちになって…

施設に暮らす A さんの一日を想像してみてください。できれば A さんの近くで1日過ごしてみてください。1日のうち、どれだけの人が A さんに声を掛けるのか、また、A さんが「おーい」と呼んで無視されたとき、どういう気持ちになるのか…。きっと、あなたは、たまらない気持ちに、そして、どうしてあげることもしない無力感にさいなまれるはずです。

A さんの気持ちを体験し、自分のこととして考えられるようになったとき、なぜ、一声掛けることが、あいさつが大切なのか分かります。A さんの家族も大変ですので、家族がなかなか関わることができないのであれば、違う人でもいい、地域で何とかしてあげられないだろうかと思えます。

私自身、ずっと30年間、現場の A さんを見て仕事をしてきたのに、ふと気づいたら A さんから離れてしまっていました。原点に立ち返って、「孤独は辛いんだ」ということを思い出し、この問題をどうするのか考えていきたいと思えます。

誰でも高齢者になってから、介護施設で他人と一緒に生活したくないはずなのに、「子どもに迷惑をかけたくない」と嫌々ながら施設に入ってきます。子どもも、特に息子は、そんな親の姿を見たくないのに、駐車場で待っていて、お嫁さんだけが A さんの様子を見に来るといことも多いです。

息子の気持ちを分かる人は多いけれど、なかなか A さんの気持ちを分かるようになることはできません。A さんの気持ちが分かる人が増えて、地域で声を掛け合える、そんな長久手市になれば、「日本一の福祉のまち」になれるのです。

「あいさつすること」と「日本一の福祉のまち」は、一見かけ離れたものに見えますが、この間には、これだけの思いがあります。しかし、これだけのことを短時間で説明するのはなかなか難しいので、いつも簡単に「あいさつをしよう」とだけ言っているのです。

介護施設の中に、地域の人や子どもを入れて運営しているところは、日本中探してもほとんどありません。在宅介護で、地域でこれができたら、それは日本でここだけであり、それが「日本一の福祉」になるのです。

介護だけでなく、子育てで悩んでいる人がいれば、地域で声掛けをしてほしい。声を掛けられることで気が楽になることもあるはずですよ。